講演タイトル	火山災害で避難するということ ～その判断の背景にあるものは～
講演者	一般社団法人 減災・復興支援機構 専務理事　宮下 加奈 氏

講演要旨

　私は三宅島に生まれ育ち、1983年・2000年の2回被災しました。1983年の噴火では溶岩流で自宅が被災しました。2000年の噴火では、全島避難により4年5カ月の長期避難を経験しました。避難生活中に防災や減災、特に避難生活について興味を持ち、現在活動しています。
　今回は、当時の状況や住民の避難への思いを振り返りながら、避難の決断と避難生活についてお話します。

〇三宅島（雄山）の噴火
　三宅島は過去約1,000年の間に15回噴火しています。特に昭和以降は4回の噴火を繰り返し、その周期は約20年に一度でと。同じ山の噴火でもその形態・被害の様相は毎回異なり、住民は噴火のたびに翻弄されてきました。

〇1983年の噴火
　10月3日15時20分過ぎに発生した噴火では、山腹にできた火口から大量の溶岩流が噴出し、18時過ぎには流下した溶岩流により南西部の阿古集落の住家約400戸が埋没しました。避難勧告から避難完了までは短時間でしたが、人的被害はありませんでした。また、避難は島内だけに留まり、島外避難は実施されませんでした。

〇2000年噴火
　6月26日19時33分に出された「緊急火山情報」により島内避難が実施されましたが、数日後にはいったん終息したかに見えたため解除されました。避難解除後の7月になると地震が頻発するようになり、山頂噴火が度々おきるようになりました。島内では噴火のたびに避難所と自宅を行ったり来たりする生活が続き、島民の生活も落ち着かない状況となりました。8月に入ると規模の大きな噴火が起き、大量の噴出物、低温火砕流、降雨による泥流被害が発生して住民の生活を脅かすこととなり、全島避難が実施されるに至りました。その避難生活は4年5カ月続き、前例のない長期広域避難となりました。

※話の内容は、私の体験談や島民、全国で被災し長期・広域避難した方々のお話しなどが含まれています。全ての島民・被災者が同じ思いで、その代表としての発言ではないことをご理解ください。